

新版現代作家辞典

大久保典夫 編
吉田 熙 生

編者略歴

大久保典夫（おおくぼ・つねお）

一九二八（昭和三）年、埼玉県生

れ。早稲田大学文学部国文学科卒。

現在・東京学芸大学教授。

著書——『岩野泡鳴の時代』、『昭和

文学の宿命』、『耽美・異端の作家た

ち』等。

現住所——（〒113）東京都板橋区大

山西町九一〇。

吉田熙生（よしだ・ひろお）

一九三〇（昭和五）年、広島県生

れ。東京大学文学部国文学科卒。現

在・千葉大学文学部教授。

著書——『近代文学鑑賞講座17 小林

秀雄』（共編著）『評伝中原中也』、『近

代日本文学における中国像』（共編

著）等。

現住所——（〒213）神奈川県川崎市

宮前区五所塚二一九—一三。



新版現代作家辞典

定価三五〇〇円

昭和五七年六月二五日 初版印刷
昭和五七年七月五日 初版発行

編者 大久保典夫
吉田熙生

発行者 岩出貞夫

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 渡辺製本株式会社

発行者 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三ノ七（〒102）
電話 東京 三三三・三七一 振替 東京 三三三

新版の序

ここでいう「作家」とは、小説・評論・劇作・詩・短歌・俳句など、「文学」にかかわる創作活動に従事する人を指す。一九六〇年代後半以後、日本の高度成長の波は文学ジャーナリズムにも未曾有の勢いで拡がり、その最新の情報を求める声が高く、かかる要望に応えて本書の初版は刊行された。一九七三年八月一日発行だが、以後、当初の予想をはるかに上回って版を重ねた。収録作家のその後の異動についてはその度に手を加えてきたが、その活躍と新作家の登場の量の増大に対応するためには、もはや全面的な改訂増補を施す以外なく、ここに新版を編んだ次第である。

この種の辞典は、一〇年が一つの節目といわれるが、旧版が五六二名の作家を収録していたのに対し、今回は七二二名で旧版の約二八パーセント増、分量についても旧版の四二四ページに対し今回は五六六ページで約三四パーセントの増となった。

以上の数字に見られるごとく、最近の文学ジャーナリズムの広範囲な繁栄はまさに戦後の「文芸復興」とも称すべきであろうか。かかる新たな文学状況を正確に把握することは容易ではないが、編者

としてはできるだけ収録作家についての現在の客観的な評価を考慮に入れたつもりである。もちろん、

編者の主観の介入は避けがたいが、戦後活躍した作家、今後活躍が期待される新作家の現況について、正確な最新情報の提供を意図していることは認めていただけるだろう。

しかし、執筆者が多数にわたり、叙述に不統一や質的差異が若干生じた点については編者の責任であり、機会を得て修正したいと思うので、大方の叱正を乞いたい。また本書出版の意図、現代文学研究とのかかわりについては「はしがき（初版）」で触れているので、併せてお読みいただきたい。

終わりに、厄介な仕事を引受けて下さった執筆者各位と、旧版同様、企画・進行の労を取られた東京堂出版編集部の西哲生・松林孝至、そして新たに御面倒を掛けた一条早苗の諸氏に心から御礼を申し上げます。

一九八二年六月

大久保 典 夫
吉 田 熙 生

はしがき（旧版）

この『現代作家辞典』は、現代日本文学についての基本的な情報を、専門家のみならず広く一般の人々に提供する目的で企画され編纂された。

戦後すでに三十年、この間文学も時代の動きとともに、作家と読者の双方にわたって大きな変化を見せている。現代文学研究も対象を拡大し、広く戦前から同時代に及ぶようになった。このような時期に、現代文学の個々の作家と作品についての知識を縮約整理して示すことは、日本文学の現在を理解し享受するためにも、また将来を展望するためにも必要なことであろう。

この辞典の特色は、「現代」という名称が示す通り、戦後三〇年の文学と文学者に重点を置いていることである。すなわち活動が戦前、戦後にまたがる文学者の場合は、戦後の活動に重点を置いて記述することに心がけた。また現在活躍中の文学者は、紙幅の許す限り幅広くこれを収録するように努めた。逆に近代文学史上著名な文学者でも、その業績が戦後に至らない場合はこれを省略した。項目選定は編者の責任であるが、各項の記述については執筆者の判断が尊重されていることは言うまでもない。現代文学についての評価は、学問的には必ずしも安定したものではなく、このささやかな試み

にも多くの問題が残っているであろうが、ともかくこの小辞典が一つの手がかりとして現代に関心を持つ人々の座右に置かれ、理解ある批判と教示を得ることができれば、編者としての喜びこれに過ぐるものはない。

終りに協力を惜しまれなかった執筆者各位と、企画・進行の労をとられた書肆東京堂出版編集部、特に西哲生、松林孝至、久保島広美の諸氏に心から御礼を申し上げます。

一九七三年七月

編者

凡 例

一、見出しは人名により、現代かなづかい表記による五十音順である。

二、作品項目は副項目として、人名項目の後に【】によって示した。詩人、歌人、俳人場合は本文中の引用をもつてこれに代えた。

三、人名項目、作品項目には現代かなづかいによって読みを示した。人名の場合、姓と名の区別は行かえによって示した。

四、人名項目の記述は、生（没）年月日、出身地、略歴、主要作品と作風の順になされている。作品の書誌的注記は簡略を旨としたが、執筆者の裁量に委ねた部分もある。外国文献等の表記法も同じ。

五、各項目に参考文献を付した。ただし項目によっては省略した。

六、書名、雑誌・新聞名には「」を、作品名、結社その他団体名、作品本文からの引用には「」を、また特に強調したい部分には「」を付した。

七、年代表記はすべて西暦とし、同世紀は、再出以後下二桁で表記した。

大塚博	大久保典夫	大河内昭爾	大塚達也	菊地弘	河村清一郎	川名大	川嶋至	川崎展宏	金子博	勝又浩	笠原伸夫	小野寺凡	尾崎秀樹	沖山明德	荻原雄一	荻久保泰幸	小川和佑	尾形明子	岡保生	大屋幸世	大森盛和	大森郁之助	淺田隆	阿部正路	安藤靖彦	五十嵐康夫	池内輝雄	池田純溢	石阪幹將	石崎等	石割透	伊藤和也	岩佐莊四郎	岩田恵子	上田正行	内田道雄	江種満子	大久保典夫	大河内昭爾	大塚達也	大塚博																										
木村幸雄	國岡彬一	久保田芳太郎	熊坂敦子	栗栖真人	栗坪良樹	黒木章	紅野謙介	紅野敏郎	小林裕子	古俣裕介	佐々木啓一	佐々木充	佐藤昭夫	佐藤健一	佐藤房儀	佐藤勝	佐藤泰正	佐藤芳幸	津田薰	坪内稔典	鳥居邦朗	中川成美	中島河太郎	西垣勤	西沢正彦	根本正義	橋詰静子	原邦良	原子朗	伴悦	日高昭二	飛高隆夫	兵藤正之助	藤岡武雄	藤多佐太夫	保昌正夫	堀井謙一	前田愛	津田薰	辻橋三郎	佐藤芳幸	佐藤泰正	佐藤勝	佐藤房儀	佐藤健一	佐藤昭夫	佐々木充	佐々木啓一	古俣裕介	小林裕子	紅野敏郎	紅野謙介	黒木章	小川和佑	荻久保泰幸	荻原雄一	沖山明德	尾崎秀樹	小野寺凡	笠原伸夫	勝又浩	金子博	川崎展宏	川嶋至	川名大	河村清一郎	菊地弘
松本慎二	松本鶴雄	松本徹	真鍋元之	馬渡憲三郎	武蔵野次郎	森啓祐	森川達也	藥師寺章明	矢島道弘	山崎一穎	山敷和男	山田昭夫	山田博光	山田有策	山田恒	吉田熙生	渡辺誠	渡辺正彦	前田愛	坪内稔典	鳥居邦朗	中川成美	中島河太郎	西垣勤	西沢正彦	根本正義	橋詰静子	原邦良	原子朗	伴悦	日高昭二	飛高隆夫	兵藤正之助	藤岡武雄	藤多佐太夫	保昌正夫	堀井謙一	前田愛	津田薰	辻橋三郎	佐藤芳幸	佐藤泰正	佐藤勝	佐藤房儀	佐藤健一	佐藤昭夫	佐々木充	佐々木啓一	古俣裕介	小林裕子	紅野敏郎	紅野謙介	黒木章	小川和佑	荻久保泰幸	荻原雄一	沖山明德	尾崎秀樹	小野寺凡	笠原伸夫	勝又浩	金子博	川崎展宏	川嶋至	川名大	河村清一郎	菊地弘

(以上二六名)

新版現代作家辭典

大久保典夫 編
吉田 熙 生

東京堂出版

あ

会田綱雄

ついで

一九一四・三・一七

詩人。東京

市本所区北二葉町生。東京府立三中四年修了で第一早稲田高等学院入学、思想的に悩んで二年で中退、働きながら日大社会科に学ぶ。思想と恋愛の行き詰まりを打開するため一九四〇年、志願して軍属として中国に渡り、南京特務機関嘱託、文化科勤務。南京で草野心平を知り、中学二、三年ごろから熱中してその後中絶していた詩作が復活する。作品を『中日文化』等に発表したが四四年、職を南京政府宣伝部中央書報発行所に転じ上海弁事処の経営に当たる。この間武田泰淳、堀田善衛らを知る。四六年帰国、『歷程』再刊とともに同人として参加、五七年刊の詩集『鹹湖』で翌年第一回高村光太郎賞を受賞した。「生きていくことが／たえまなしに／僕に毒をはかせる／いやおうなさのなかで／僕が殺してきた／いきものたちの／おびたらしい／なきがらを沈めながら／いまでは僕も／神のように／僕自身をゆるしているけれど／まもなく／あの暗い天の奥から／僕をめがけて／ふつてくる雪が／邪悪な僕の／まなこをとぎすとき／僕のなきがらが／なきがらだけの重み

で／そのまましずかに／沈んで行くように」(『鹹湖』)速力のあるダイナミックな会田の文体にはヒューマンな庶民感覚と、いどみかかってゆくような加害者の無気味さが漂う。人間の不条理としての「毒」を肯定する大らかさと、それを超えて生の始源へ迫ろうとする強さと逞しさがあふれる。暗いようでどこか明るく、暖かいようできびしくつらい不思議な詩風は、それが魅力でもあり、被害者意識の強い戦後詩の傾向の中で会田の詩をユニークなものにしている。外地体験を材とした作品が多いが、それが特異な精神の辺境を目ざす会田のボエジーと重なり、求心的な姿勢に律せられて、一つの詩的宇宙を形成している。ほかに『狂言』(六四)、『汝』(七〇)、総合詩集『会田綱雄詩集』(七三)、『遺言』(七七、読売文学賞)などの詩集がある。さまざまな詩人達とのかかわりを論じたエッセイ集『人物詩』(七八)も興味深い。

『参考文献』大岡信「現代詩の魅惑——恐怖の主題について——」(『国文学』六九・九)、飛高隆夫「会田綱雄」(『国文学』七一・二〇)、山本太郎「ピエロタの鬼」(『会田綱雄詩集』思潮社、七五)。(原 子朗)

饗庭孝男

あきだ

一九三〇・一・二七

仏文学者、

評論家。滋賀県生。一九五三年南山大文学部卒業。青山学院大仏文学教授。六六年「戦後文学論」によって評論家として登場し、へ審美派グループの中心人物となった。「天

皇制を主軸とする価値体系の決定的な崩壊、秩序の消滅が自我の形成期における原体験（『終末論の文学』）となった（戦後世代）の一員である彼は、「廢城が原点」である

（同）、『中世を歩く』（七八）、『批評と表現』（七九）、『知と感性の対話』（八〇）、『自然・制度・想像力』（八〇）等がある。（佐藤昭夫）

青島幸男

あおしまゆきお

一九三二・七・一七

小説家。

東京生。早大第一商学部を卒業。放送作家としてスタートをし、初期のテレビ界を支えるとともに、作詞家として植木等の曲などを手がけて、ハスラーブームVやハ無責任時代Vの仕掛人の一人となった。そして、自らもブラウン管に登場して、大袈裟な身振りでハアオシマだあVと叫び、それが流行語にもなった。さらに、政治家としても、選挙のたびに、選挙運動をしない候補者として話題を集め、参議院全国区の上位当選を繰り返している。また『人間万事塞翁が丙午』（八一）で、第八五回直木賞を受賞した。これは作者の身内をモデルに、下町でいきいきと生きる人々たちを、温かい眼で、しかし客観的に描いた作品で、古典落語の語り口との共通点が見られる。テレビ文化の寵児が、この視聴覚時代に、逆に活字文化に挑みはじめたことに、新たな時代の予兆を感じる。（荻原雄二）

青野季吉

あおのきよきち

一八九〇・二・二四～一九六一・六・二三

評論家。新潟県佐渡郡生。一九一五年三月、早大英文科卒業。二二年五月、『心霊の滅亡』を『新潮』に発表して文芸評論家としてデビュー。『種蒔く人』『文芸戦線』同人として、大正末から昭和初頭にかけて『調べた』

芸術」「自然生長と目的意識」「外在批評論」など活発な評論活動を展開、混沌期のプロレタリア文学運動にひとつの指標を与え、多くの影響を及ぼした。その指導的な主論文は、『解放の芸術』（二六）、『転換期の文学』（二七）、『マルクス主義文学闘争』（二九）などに収録されている。三八年、〈人民戦線〉の治安維持法違反の嫌疑で検挙され、獄中で転向。保釈後、『文学界』同人に誘われ同誌に内省的なエッセイ「経堂裸記」を連載した。戦後は穏健なヒューマニストとして日本ペンクラブの再建や文芸家協会の仕事に尽力、一時、『社会タイムス』の社長兼編集局長も務めた。強烈な文学主張に代わって、『文学的人生論』『私の文学手記』（四七）、『現代文学論』（四九、第一回読売文学賞受賞）、『文学五十年』（五七）など、平明だが人生体験の深みの加わった多くの評論・随筆類を残している。また『群像』創作合評における作品論の提唱、『現代日本小説大系』『現代文学論大系』（共に河出書房）の編集参与とその完成は、学界ならびに文学研究に大きな貢献をした。他に著書として、『佐渡』（四二）、自伝小説『一つの石』（四三）、『青野季吉日記』（六四）、『青野季吉選集』（五〇）などがある。

【文学五十年】 自伝的回想録。一九五六・五・一一〜五七・九・一三、『東京新聞』連載。五七・一二、筑摩書房刊。一〇代半ば以来、五〇年間にわたり文学と政

治の世界に誠実に生きぬいてきた人生を坦々と振り返った回想録。文壇内外の貴重な証言も多い。

【参考文献】 祖父江昭二『青野季吉』（『解説と鑑賞』六〇・二）、『青野季吉』（『文学』六三・七）、上田正行『青野季吉の評価』（『近代文学』五）有斐閣、七七。

（石崎 等）

青野 聰 一九四三・七・二七〜 小説家。

東京生。文芸評論家青野季吉の三男。早太文学部演劇専修中退。大学在学中より、ヨーロッパ、中近東、北米、中南米を約一〇年にわたり放浪。一九七八年、継母とまます子の関係を題材にした半自伝的作品、『母と子の契約』（『文芸』一一月）で第八〇回芥川賞候補となり、七九年、『愚者の夜』（『文学界』六月）で第八一回芥川賞を受賞。『愚者の夜』は、ヨーロッパで漂泊を続ける根なし草の日本人青年とオランダ人女性との関係を描いた作品で、特に、そのオランダ人女性が、生々しく、血のかよった女として巧みにとらえられている。著書として、『天地報道』（鳥書房、七二）、『さまよえる日本人とオレンジ色の海』（草思社、七八）、『母と子の契約』（河出書房、七九）、『愚者の夜』（文芸春秋、同）、『試みのユダヤ・コムプレックス』（文芸春秋、八二）、『歩く風車——列島紀行』（河出書房、同）がある。

（玉村 周）

青山光二 一九一三・二・二三〜 小説家。

神戸市生。旧制三高を経て東大文学部卒。滋賀県立長浜商業教諭、玉川学園教授などを経て、戦後は文筆業に専念している。戦後間もなく発刊された『夜の訪問者』（四九）は作家としての出発点を示している。ここに収められた七つの中短編小説は、おおむね映画産業を舞台とする私小説ふうの作品であるが、戦後の風俗を背景に男女の愛憎がきめ細かに描かれている。ことに「夢の工場にて」は、ある映画会社の労働争議というアクチュアルな出来事と、その書記長の身にふりかかる病妻の死をない交ぜた诗情豊かな作品である。のち織田作之助とのへ暗い苦しい青春彷徨からその死に至るまでの交流を書いた『小説 織田作之助』（五七）を出したが、このころから大衆小説に転じ、非情なヤクザの世界とその中にうたかたのように漂う愛を鮮明に描き出している。主な作品に『鬼辰の息子』（現代社、五七）、『修羅の人』（講談社、六五）、『獣の献身』（講談社、七二）、『闇の構図』（新潮社、七九）、『われらが風狂の師』（同、八一）などがある。（池内輝雄）

赤江 瀑

あかえ

一九三三・四・二二

小説家。

山口県生。本名、長谷川敬。日大芸術学部在学中より詩誌『詩世紀』に拠り詩を発表。後にラジオドラマがNHK脚本募集に入選、シナリオ・ライターとなる。明治百年記念演劇脚本募集に自作の歌舞伎台本を投稿、最終審査まで残り好評を受ける。それを切っ掛けとして、処女小説「ニジ

ンスキーの手」（七五）を書き、第一五回『小説現代』新人賞を受賞。特異な小説世界が読者の興味をひいた。五木寛之は「鮮烈な新鋭」と呼んだ。七三年と七五年には直木賞候補、七四年「オイディプスの刃」により第一回角川小説賞を受けるなど、旺盛な創作活動を続けている。作品は日本の伝統芸術に材を拾ったものが多く、特に歌舞伎への傾倒が深い。背徳的な色彩をたたえながら展開するストーリーの面白さには定評があるが、それがそうした伝統美の世界への該博な知識に支えられているのは言うまでもない。（中川成美）

赤川次郎

あかがわ

一九四八・二・二九

小説家。

福岡県生。中学時代より創作を始め、桐朋高校在学中には千枚以上の長編を試みた。が、高校卒業後平凡なサラリーマン生活に入り、一〇年近くを経るまで作品はほとんど他人には見せなかった。たまたま会社の同人誌に小説を発表したのが切っ掛けとなり、種々の文学新人賞に応募、七六年「幽霊列車」が第一五回『オール読物』推理小説新人賞となった。以後、続々と作品を発表、現在最も活躍する推理作家である。代表作に『三毛猫ホームズ』シリーズがあり、また八〇年には『悪妻に捧げるレクイエム』で第七回角川小説賞を得た。彼の作品の特色は推理小説には珍しく軽快で明朗な点にあり、いわばユーモア・ミステリーという新分野を開拓したといわれている。直線的で明快な筋立

てながら謎解きの面白味も失われていず、そうした点が若い読者層の大きな支持を得ている。「新世代のチャンピオン」(中島河太郎)といえよう。推理作家協会会員。

(中川成美)

阿川弘之

ひろゆき

一九二〇・一二・二四

小説

家。広島市生。広島高師附属中学・旧制広島高校を経て、一九四〇年、東大国文科に入学。高校の終わりが、島尾敏雄らの同人雑誌『こころ』の同人となり、作品を発表。四二年、東大卒業。改造社版『志賀直哉全集』を読み、強く惹きつけられ、卒業論文は『志賀直哉』。在学中に海軍予備学生を志願、採用決定。佐世保海兵団に入団。半年の訓練をへて翌四三年、海軍少尉となり、軍司令部附となる。四四年、中尉に進級、支那方面艦隊司令部附となり、中国に渡り、漢口に勤務。四五年、敗戦、大尉となり、俘虜として年を越す。四六年、復員、原爆のため、実家の家財一切が失われたことを知る。やがて上京、小説を書き始め、中国から復員した時の体験を描いた『年年歳歳』を志賀直哉の推薦で『世界』に、『雲三題』を『新潮』に発表、作家として認められる。前者は、焦土と化した広島の様や復員列車の様子、再会した家族たちの状況を手堅いリアルイズムの手法で描いた好短編だった。四九年、増田みよと結婚。五〇年、最初の短編集『年年歳歳』刊行。また四九年から部分的に発表してきた『春の城』を完成、五二年に

新潮社から刊行し、翌五三年、読売文学賞を受け、作家としての地位を確立した。戦争についてのルポルタージュ的側面を持つが、自伝的内容の作品で、戦争中から戦後へかけての青年の典型がそこには描かれていた。この年、広島原爆被害を描いた『魔の遺産』を『新潮』に連載、翌五四年刊行。さらに五五年には『雲の墓標』を発表した。この年、岩波版『志賀直哉全集』の編集委員となり、またロックフェラー財団の留学生として妻とともに渡米。翌年帰国。五七年、『夜の波音』発表。好短編として注目された。その他、『坂の多い町』(五七)、『青葉の翳り』(六〇)がある。五九年、ポルトガル領(当時)ゴアに旅行。また初めての新聞小説『ぼんこつ』を『読売新聞』に連載。一人称小説で、日本語教授のため、ロスアンゼルスに來た『私』がそこで三人の日本人男女に会い、アメリカ女性と一時的に結ばれ、その人間関係を通して、アメリカ批判がなされたりすることを手堅い文体で描き出している。六二年、田村泰次郎と香港、南ベトナム、カンボジアに旅行。同年から翌年にかけて『あひる飛びなさい』を『週刊読売』に連載。六三年、世界の乗物(乗りある記)を書くため、ヨーロッパ、ソ連、アメリカへ旅行。阿川は少年時代から乗物に関心が深かったようで、その方面の随筆や紀行文も多い。六四年、『山本五十六』を『文芸朝日』に連載。六六年、子供のいる夫婦の日常生活を夫婦だけの世界に限

定して描いた「舷燈」を『群像』に発表。六八年から「暗い波濤」を『新潮』に連載。七四年刊。六九年、日本ペンクラブ専務理事となり、翌年、国際ペンクラブ大会出席のため韓国に行く。同年『大と麻ちゃん』刊。その他、短編集『軍艦ボルカ』（七四）、『軍艦長門の生涯』上下（七五）、『米内光政』上下（七八）等がある。戦争体験と広島を書きつづけ、軍人の生涯や艦船を描いて健筆をふるった阿川だが、一方で日常生活の世界にも筆を染め、いわゆる「第三の新人」との共通性が認められようとしている。

【雲の墓標】^{ひらけ} 長編小説。一九五五・一～一二、『新潮』に連載。六五、新潮社刊。ある学徒応召兵の手記をもとに書かれた作品で、主人公吉野次郎の手記の形式をとっている。吉野は親友とともに学徒応召で海兵団に入隊、予備学生となり、事故死、戦死と友人を失っていくが、主人公は転属で生きのびる。しかし敗戦も近い七月九日、敵機動隊に突入、戦死する。一方藤倉は無意味な死を受け入れられず、しかも生きのびることに虚しさを感じている。知識人である主人公たち青年が戦争にいかに対処するかという苦悩を描いた戦争文学の傑作として、阿川のすぐれた長編として、注目されている。

【山本五十六】^{いざな} 長編小説。一九六四・一〇～六五・九、『文芸朝日』に連載。六五、新潮社刊。新潮文学賞。六九年、同書に約三〇〇枚加筆し、『新版山本五十六』

として新潮社より刊行。第二次大戦中、連合艦隊司令長官であった山本は、四三年四月、作戦指導のためラバウルからブーゲンビル島のバラレヘ向う飛行機上で戦死する。山本の死は、当時の日本国民に大きな衝撃を与えた。軍縮の実現に努力し、日独伊三国同盟に反対し、大東亜戦争開戦に反対し、戦死した山本を、単に英雄としては描かず、ものごとくにこだわらず、決断力がありながら、自由主義的でスマートで、バクチ好きな人間の側面を強調しつつ阿川的人間像として描き出す。山本五十六の伝記として詳細をきわめているが、ここにはやはり作者の青春の情熱がこめられているのである。

【参考文献】 島尾敏雄「『春の城』と『天命』」（『現在』五二・一〇）、島尾敏雄「魔の遺産」（『近代文学』五四・七）、寺田透「現代新人論」（『現代日本作家研究』未来社、五四）、村松剛「解説」（『新潮現代日本文学』51）七〇。

（塚越和夫）

阿木翁助

^{あきうすけ}

一九一二・七・一四

劇作家。

長野県諏訪市生。本名、安達鉄翁。諏訪中学卒業後東京プロレタリア演劇研究所からムーラン・ルージュに転じ、一九三五年九月島村龍三らと『新喜劇』を創刊。翌年『新喜劇座』創立。〈新喜劇〉運動の中心となる。なかでも「女中あい史」（『新喜劇』三六・二）は好評。松竹東京新派文芸部らを経て、戦中は農民演劇運動に活躍。戦後の四七年

諏訪で「青年演劇」の創刊に参加し、同年六月号の「長女」は戦後の荒廃した時代の愛情を描いた代表作となった。「冬の星」(『日本演劇』四六・一)、「記念写真」(『青年演劇』四七・一二)、「青い林檎」(『現代劇』五五・七)、「演歌有情」(五八・一〇初演)ら主に小市民の世界を背景にした軽妙な作が多く、他にも松竹新喜劇や森繁劇団上演によるもの、NETドラマ「徳川家康」らは、役者を生かした作として定評がある。六五年日本放送作家協会理事長。六八年日本テレビ製作本部長。また、七七年には、紫綬褒章を受けた。現在日本放送作家協会理事。共立女子大講師。

(石割 透)

秋浜悟史

あきもと さとし

一九三四・三・二〇

劇作家。

岩手県岩手郡玉山村(旧、渋民村)生。盛岡の私立岩手中学時代、すでに彼は石川淳、小林秀雄、ランボーに心酔して詩作に励み、モリエール喜劇に溺れる早熟な少年だった。一九五四年に早大演劇科に入學し、学生劇団「自由舞台」で活躍、卒業後は岩波映画に八年間在籍。大学三年生の五年に発表、上演されたのが処女戯曲「英雄たち」(喜劇一幕)で、これを皮切りに、南部地方の方言を自在に駆使し、故郷の玉山村をモデルにした「姫神村」の風土にかななまでに根を下ろして、この村の戦後における変転を年代記風に描く「リンゴの秋」(五九)、「ほらんばか」(六〇)、「しらけおぼけ」(六七)、「おもて切り」(六九)など

の一連の戯曲を生み出した。ことに「冬眠まんざい」(六五)は高められた詩的言語の美しさで名高い。六七年、「ほらんばか」の作・演出で紀伊国屋演劇賞受賞。六〇年安保闘争の挫折体験とその後の若者たちの生き方を自虐的に描いた「幼児たちの後の祭り」(六八)で第一回岸田戯曲賞受賞。六八年以来、「劇団三十人会」の代表となり、演出家としても活躍したが、七三年に同劇団は解散。七四年に書いたNHKのラジオ・ドラマ「親守り子守歌」がイタリヤ賞グランプリを受賞。現在は宇治市に住み、清水邦夫作品を中心に演出家としての活動が目立つ。

【参考文献】

石沢秀二「コトバの錬金術師」(『劇団三十人会公演パンフレット16』六九・五)、根村絢子「劇との対話——シアトリカルな才能」(『海』六九・七)、別

役実「方言を越えるもの」(『文芸』六九・七)、宮岸泰治「劇作家の転向」(未来社、七二)。(扇田昭彦)

秋元不死男

あきもと ぶしお

一九〇一・一一・三

七・七

二五。俳人。横浜市生。本名、不二雄。旧号東京三。嶋田青峰に師事。「土上」同人として新興俳句運動に参加、生活に即したリアリズム俳句を実践した。西東三鬼らと「天香」を創刊したが、一九四一年、弾圧、検挙され二年間の獄中生活を送る。四八年、山口誓子主宰「天狼」の創刊に参加、不死男と改号。四九年、「氷海」を創刊、主宰。俳句もの説による即物的な手法を唱えたが、晩年は飘逸、